

## 【小説部門・最優秀賞】

琥珀の色彩

私立筑紫女学園高等学校 第2学年 木村茉緒

頭上に広がる青空に、水をたっぷりと含ませた絵筆に青の絵の具を浸し、真っ白なキャンバスに大胆に広げる姿をイメージする。陽の光を馴染ませた、あたたかくて優しい、清々しい春の陽気を写し出したような色。余計な色はいらない。ただ、今自分の視界にある清涼な美しさを、形にすればいい――言葉にするのは、簡単だけれど。

私が左手に持つパレットには、ごちゃごちゃと色々な青が混ざり合っている。全然、綺麗じゃない。こんなもの、私が求めている青ではない。私が欲しい青は、もっと柔らかい。もっと澄んでいる。もっと美しい。

求めている色に、もうずっと辿り着けていない。私のキャンバスは、色のないままだ。鉛筆で描いた下書きが、外側だけを取り繕った空っぽな箱に見えて、どうしてか私みたいだと思った。

美大を志望したことに、確固たる意志や目標なんて立派な理由があったわけではなかった。両親共に絵画が好きで、一人っ子の私はよく展覧会に連れ回されていたから、絵というものを未熟に感じていたこと。小学生の頃から絵画教室に通っていて、それが高校生まで続いてしまったこと。要領が良いといふかなんといふか、今まで絵を描くことを苦痛に感じたことがなかったこと。多少なりとも才能というものがあつたのか、好きなようにキャンバスに色を描けば、その度にそれなりの結果を出せていたこと。そんな小さな結果の積み重ねで、きっと私は大学生になった今でも絵を描き続けている。

浪人もせずに第一志望の美大に合格できたのは、多分まぐれだった。一年生の中盤あたりでそれを感じ始めて、二年生になった頃には確信していた。同学年の生徒のキャンバスには、到底私には作れないような色が乗っていた。私には思いつかないような構図で、表現で、自らの心のうちの風景がいきいきと描かれていた。才能の差も、努力の量ももちろん違うのだろうが、まず美術に対する向き合い方も愛着も違う。それを見せつけられるたびに、心に鉛をぶら下げられていくような気分になっていた。

そんな曇った気持ちのままに大学を過ごし、この春休みを終えるともう三年生になる。もう辞めてしまおうか、なんて実行できっこないことを考えながら、押入れで埃を被らせていた今までに描いた絵を整理しているときに出てきたのが、今向き合っているこのキャンバスだ。二年生の春、門司港に遊びに行ったときに、旧門司三井倶楽部という洋館を描こうとして、どうしても色を乗せられずに、下書きのまま諦めてしまったものだった。

――今なら、描けるのではないだろうか。あの日は描けなかったけれど、今なら、根拠のない、けれど結果なんてわかりきった絵空事を思って、私はこのキャンバスを持

って門司港にやってきた。今は空虚なこのキャンパスにあるがまさに色彩を乗せれば、空っぽのような気がする自分の何かが埋まるのではないか、という予感のようなものがして。まあそんな予感は、この一切の色を乗せられていない現状に破綻したのだが。虚しいような、仕方ないと諦めてしまいたいような、そんな気分だった。けれど、ここでやめれば私に何が残るのだろうか、と。強迫観念じみたそれが、私をここに留まらせている。

はあ、と溜息を吐く。気持ちの良い陽気だと感じていたのに、太陽が高くなるにつれて薄く汗が滲み始めた。……潮時、なのだろう。一年前になんとなく描いていた絵なんて、切り捨ててしまうべきなのかもしれない。初めて自分から強く描きたいと思った絵だから、寂しさが無いといえば嘘になるけれど。

キャンパスと諸々の画材を大きめのバッグに詰め込んで、霏がかかったような気持ちで立ち上がる。肩にかかった、もう身体に馴染んでしまったじんわりとした重みに、気が減りそうだった。名残惜しさを振り切るようにバッグを持ち直し、駅へと足を向けようとして、ふと思った。

——この建物を見るのも、これが最後かもしれない。

まだ三年生とはいえ、個人的に絵を描くためだけに遠出するなんて、これからはそんな暇はないだろう。就職に向けて、本格的に進路を決定しなければならない。この春休みだって、あと一週間もすれば終わる。この旧門司三井倶楽部を見ることも、もしかしたら門司港を訪れることだってもうないのかもしれない。

ちらりと頭だけで振り返って、背を向けている洋館に目をやる。描きたいと思ったあの日から、その歴史を感じさせる上品な佇まいは変わっていない。確か、一階にレストランが、二階に展示があるのだったか。この建物を描こうと決めた時に調べたはずだが、どうにも記憶が朧げだ。そして、実際に中に入ったことも、一度もない。

……入ってみようか。中を見れば、もしかしたら良いアイデアが浮かぶかもしれないし、そうでなくとも、せっかくの門司港なのだから少しくらい観光しても良いだろう。絵を描くことばかりに夢中で、前に来たときも今回も、ここに来るまでの道すがらに海を眺める程度のことしかしていない。それは少し、もったいない気がする。

腕時計を見ると、針は十一時過ぎを指していた。急いで帰宅して遅めの昼食を取る、という選択肢もあるが、観光して帰るのならまだ時間がある。……そうだ、まだ時間はある。誰に言うでもなく胸の内で言い訳のようなものをする。

駅に向かって足をもた踵を返して、私はどうしようもない呼吸のしづらさと居心地の悪さを抱えたまま、旧門司三井倶楽部に足を踏み入れた。

二階の展示は、大正十一年に来日したアインシュタイン夫妻が実際に宿泊した部屋を再現した「アインシュタインメモリアルルーム」と、門司出身の女流作家である林芙美子さんの資料が展示されている「林芙美子記念室」の二つに分かれていた。靴下ごしに感じる絨毯の少しごわついた柔らかさと、歩くたびに鳴る床板が軋む音が、この建物の歴史を物

語っている。

「アインシュタインメモリアルルーム」を一通り見終わって、数部屋に分かれた「林芙美子記念室」に移動する。どの部屋にするか迷ったが、奥から順番に回っていくことにした。部屋に踏み入ると、年季の入った床がぎしりと音を立てる。部屋は、林芙美子さんの経歴などが書かれたパネルが壁に取り付けられ、「放浪記」の原稿などの展示物が入ったケースの他にも、レトロな調度品などが置かれていた。一人がけのソファに手をつくると、思いの外ふかふかとした感触が手のひらを覆った。

次の部屋に行くと、他の客だろう歳をとった女性が展示品を眺めていた。地元の人だろうか。少ない荷物で、普段使いできるような服に身を包んでいる。皺の刻まれた顔を綻ばせて、懐かしむような表情をしていた。そう考えながら女性の後ろを通り抜けようとする、不意にくるりと振り返った。

「あなた、一昨日くらいからずっと絵を描いてる子でしょう？ ふふ、ごめんなさいね。家の窓からここが見えてしまうものだから。ね、ここに来るのは初めて？」

内緒話でもするように、その女性は口に手を添えてそう言った。例えるなら、路傍に咲いているスマイルのような、どこか少女然とした愛嬌のある微笑みだった。

女性の目は、肩にかけたバッグに向けられている。バッグからは、収まりきらなかったキャンパスが飛び出していた。なんとなく居た堪れないような気持ちになって、バッグの持ち手をぎゅっと握り込む。

「中に入るのは、初めてです。……もう、描くのはやめようと思って。最後に、展示を見に来たんです」

「あら、そうなの。……なんだか、もったいないわね。せっかくの良い絵なのに」

「良い、絵？」

色もつけていないのに。いや、そもそも、彼女の家がどこにあるのかはわからないが、薄く鉛筆で下絵が描かれているだけのキャンパスが、彼女には見えていたのだろうか。

困惑している私の様子に気づいたのか、女性は小さく声を出して笑った。少しも嫌な感じのしない上品、微笑んだと表現した方が似合う、そんな笑い方だった。華美な服を纏っているわけでもないのに、大人の女性というフレーズが頭をよぎった。

「だってあなた、朝からお昼過ぎくらいまで、ずっと真剣な顔して絵と向き合っているんだもの。そんなあなたの絵が、良いものじゃないはずがないわ。わたしも絵に詳しいわけじゃないけどー絵にはね、魂が宿るらしいから」

これ、夫の受け売りなのよ、と彼女はおかしそうに笑った。そして、ずいっと顔を寄せ、はしゃいだような表情で私の手を握った。息を潜めるように、ねえ、と言葉を始める。

「ちょっとだけ、わたしに口説かれてくれないかしら？」

門司港でこんなにゆっくりして観光を満喫するのは、初めてかもしれない。少なくとも、今食べている焼きカレーの味は、二回目ではないと思う。そう考えてしまうくらいに、私

はこの熱すぎるくらいの鉄板皿に乗せられた焼きカレーを気に入っていた。

けれど想定外なことに、この昼食のテーブルに着いているのは、私だけではなかった。二人がけテーブルの向かいの席には、優しげな貌の皺を深めて微笑む、林芙美子記念室で出会った彼女がいる。私と同じ料理がもう一皿、テーブルに並んでいた。

わたしに口説かれて、なんて安っぽいメロドラマのワンシーンのようなことを言われて、その誘いに乗ってしまったのは、苛々して判断力が鈍っていたせいだ。普段なら絶対に、自分の祖母くらいの年齢とはいえ、知らない人の誘いに乗って、あまつさえついていくなんてことしないのに。

「あなた、大学生？」

「はい。美大に行っていて、実家に一旦帰ってきたんです。せっかくなので、描きかけのを描こうと思って。……結局、描けなかったんですけどね」

初対面の人に何を話しているんだろう。自分の卑屈さを晒してしまったのがなんだか申し訳なくて、誤魔化すように、鈍く橙の光を反射するスプーンを口に運んだ。半熟卵の甘さと、ぴりとしたスパイスが口の中で混ざり合う。

カレーを冷ましているのか、スプーンの上に掬ったままに、彼女は言葉を続けた。視線は私ではなく、キャンパスが入ったバッグに注がれている。

「……できないのは、色塗りがしら。ええ、難しいものね。色味ひとつで絵の印象はがらっと変わるんだって、夫がよく言ってたわ」

「旦那さんは、絵を描いていたんですか？」

「そうよ。仕事じゃなくて、趣味の範疇だったけれど。でもずっとやってただけあって、なかなか上手かったのよ。夫がぼっくりいっちゃった後も、一枚も捨てずに残してあるんだから」

何かを懐かしむように目を細めて、目尻に細く皺がつくられる。展示品を見ていたあのときと、同じ表情だ。夫婦でこんなふうに焼きカレーを食べたり、地元の観光地に出かけたりしたのだろうか。柔らかな雰囲気をつらつら纏った夫婦が、仲睦まじく寄り添っている様子を、自ずと想像してしまう。

彼女はスプーンを置いて、おもむろに両の指を絡ませた。その左手の薬指にはめられている細身の指輪が、妙に目についた。金のリングが、濃い橙の丸い宝石で飾られている。

「この宝石ね、琥珀っていうのよ。何百万年も前の樹液が化石になったものだって言ってたわ。結婚指輪はこれが良くて、夫が言って聞かなくて。……それで、わたし思ったの。あの建物ー旧門司三井倶楽部を描くのって、琥珀を描いてるみたいだって」

「琥珀を、描く？」

「ええ。あの建物が元は宿泊施設だったってことは知ってる？ だからきっと、あそこにはたくさんの人々の色々な歴史や記憶が閉じ込められていてーもちろん、何百万年ってわけじゃないけどね。でもほら、琥珀みたいでしょう？」

面食らった、というか、自分はあの建物の外観しか重視していなかったから、そんな見

方もあるのか、と驚いてしまった。地元だからこそ、だろうか。もしかしたらこの女性は、あの建物を琥珀と重ね合わせることで、夫との記憶を再生しているのかもしれない。

話しているうちに、鉄板皿は空になっていた。手持ち無沙汰だったけれど、彼女の話聞いていたくて、水滴に外側を濡らすコップを手にとって、一口飲む。ひどくぬるくて、けれどどうしてか、それがちょうどいいような気がした。

「だからね、わたし、嬉しかったのよ。時間はすべてを変えてしまって、あの建物だっていつかは無くなってしまふけれど、あなたが絵を描くことで、今までを切り取って保存してくれるような気がして。——ねえ、無理にとは言わないけれど。琥珀に、色をつけてあげてほしいの」

汗をかいている。でも、嫌なものではない。胸の内に燻っていた靄は、相変わらず消えてはくれないし、私だけが余所者な気がして、居心地の悪さは健在だけれど。それでも、彼女の琥珀に色を塗ってやりたいという気持ちが、ないわけではない。

すうっと息を吸い込む。バッグから飛び出たキャンバスの、薄くなってぼやけている下書きが視界の端に映った。今なら描ける、なんてそんな無謀なことは思わない。でも一回くらい、見栄を張っても、欲張っても、バチは当たらないと思うから。

左手に持ったパレットに、色を作る。空の青だ。陽の光を馴染ませた、あたたかくて優しい、清々しい春の陽気を写し出したような色。そんな理想の色が私に作れるだなんて、自惚れていない。ただ、私が綺麗だと思える色を乗せられたら、それでいい。絵筆に、青を染み込ませる。手が少し、寒くもないのに震えていた。

口角を無理に上げて、絵筆を持つ手に力を込める。琥珀がよく似合うあの女性を、思い出す。絵筆が、キャンバスに触れた。